

2013年9月8日(日) 北京国際交流基金

於：北京日本文化センター多目的ホール

報告者：池田玲子

第3回 日本語教育学シリーズ講座

「なぜ協働するのか ―グローバル化の中での日本語教育のあり方―」

館岡洋子(早稲田大学)

池田玲子(東京海洋大学)

◆プログラム

- 1) 開会：講師紹介
- 2) 活動①：「ピア・ラーニング」って何？
授業風景からイメージする、期待と不安を話し合う
- 3) 講義①：ピア・ラーニングの背景―グローバル人材育成の観点から(池田)
ピア・ラーニングの学習理論(館岡)
- 4) 講義②：実践の紹介(池田)
ピア・レスポンス／教師添削ミニワーク／総合学習(読解・会話・作文)
異文化理解(ケース学習)／初級クラスの実践
- 5) 休憩
- 6) 講義③：実践の紹介(館岡)
実践の変容／プロセスの支援／自分の問題として考える
- 7) 活動②：学習者体験のミニワーク(協働学習) ―日本の昔話を使って―
- 8) 活動紹介③：デザインする ―上記の体験をふまえて自分たちでデザインする―
* 予定変更：創造的な活動のための素材の選び方についてお話ししました。
- 9) 質疑応答
- 10) 閉会

2013年9月8日(日曜日)、北京日本文化センター多目的ホール(北京国際交流基金)においてピア・ラーニング(協働学習)について講演とワークショップをしました。館岡も池田も北京でのピア・ラーニング講演は二度目です。今回の参加者の中には、前回の講演に参加して下さった方も数名おられました。

講演の話題は、グローバル化社会におけるピア・ラーニング(協働学習)としました。近年のグローバル化の動きは世界の教育全体に大きな影響を与えつつあります。中国での日本語教育の今後を考える上でもグローバル化というタームは無視できない、むしろ重要な社会要素として捉えていく必要があると思います。そこに、ピア・ラーニングの考え方が大きなヒントになると私たちは考えているので、このテーマにしました。

中国も日本や他のアジアの地域の教育と同様に、教師中心、知識伝達を目的とした伝統

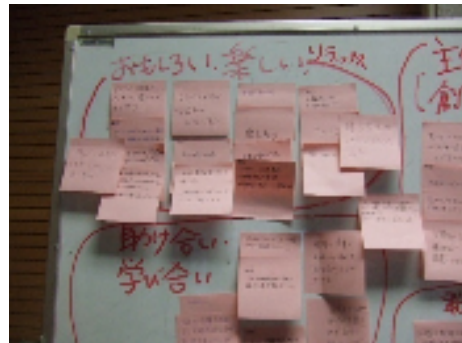


的な教育の体制が根強くあるので、学び合いの学習、創造的な学習であるピア・ラーニングの考え方をここに導入していくのは簡単なことではありません。そこで私たちは、まず、ピア・ラーニングとはどのような考え方なのか、その学習観はどう実現可能なのか、実際にどのような実践があるのかについて、講義や活動を通じて理解してもらうことにしました。

池田の講義部分では、現代社会におけるピア・ラーニングの意義づけ、館岡の講義ではピア・ラーニングの定義、実践を支える理論についてお話ししました。これらの講義の中に入れ込むかたちでミニワークがありました。後半では実際に私たちが日本で実施しているピア・ラーニングの学習活動を紹介したあとで、ピア・ラーニングの学習者体験してもらいました。実は、最初の計画では、この次に日本語現場をもつ教師が自分の教室でピア・ラーニングの学習を実際にデザインしてみる活動も予定していましたが、残念ながら、講師の二人が講義部分に情報を盛り込みすぎたために、そのあとの時間が不足してしまい、授業デザインの活動はできませんでした。これに変えて、創造的な課題の素材選びについて少しだけお話ししました。漫画の利用、新聞記事や写真、中国の情報誌の絵や写真などが利用できるのではないかという提案でした。

この講座を終えて、参加者の皆さんからは次のような感想をいただきました。

1. ピア・ラーニングはアジアではなく欧米の教室に適していませんか。私のクラスでやれば、みんな静かにしていて積極的に発言はしないと思います。
2. 授業の最後は、テキスト、自己、他者の関係を教師はどうまとめればいいのでしょうか。
3. 答えの出ない、あいまいな授業では学習者は満足しないのではないのでしょうか。
4. この講演を聞くまでは精読の授業にはピア・ラーニングは無理だと思っていましたが、具体的な実践例を紹介してもらったので、これからはやってみようと思います。
5. これまでピア・ラーニングは学習者の会話コーナーのようなイメージをもっていましたが、でも、実際には様々な問題がおきるので、考える必要が出てくるとわかりました。
6. ピア・ラーニングは時間がかかるし、たくさん学習できないので、授業として効率が悪いのではないのでしょうか。
7. 中国語をどれぐらいの割合で使ってもいいとするのでしょうか。
8. 初級から取り入れる場合には、どのような割合で可能でしょうか。
9. 先生方が過去に教えていた方法から、なぜピア・ラーニングにしようと思ったのですか。また、協働学習を研究し追究していこうと思われ



たのはどのような理由からですか。

限られた時間の中では、私たちが伝えなかったことのうち、わずかしか伝えられませんでしたし、途中でみなさんといっしょに議論したい新たな課題もたくさん出てきました。ここにまとめた皆さまからのご感想をわたしたちはとても貴重な課題として、今後考えていきたいと思います。できれば中国の教師の方々と一緒に検討していけたらと思います。

今回の講座を日本の日本語教師と中国の日本語教師との学び合いの場と捉えると、これはまさに教師の協働学習の場だと思います。だとすると、あの場は、何かとおきの解答が誰かから簡単にもらえる場だったのではなく、また、一人で考えて解決できるような課題のために他者と議論する場でもなかったはずです。私たちが今回の講座で提示した課題は、きっとこれからの中国の日本語教師と私たち日本の日本語教師、そして世界の様々の地域で日本語教育の実践をしている方々との議論をしていきたいと思っている課題です。

教師間の協働のプロセスに生まれる創発は、最初に探していた解答ではないかもしれませんが、でも、他者との議論の中でしか生まれてこない別の課題の解答なのだと思います。こうした教師たちの協働の学びの場は、今後世界の各地域間のネットワークをつなげることができれば実現は可能だと思います。教師主導からの脱却や自ら考え他者と学び合う学習について検討するという共通課題を掲げて、日本語教師たちのピア・ラーニングネットワークを拡大していきたいと思います。

まずは、この北京での議論の続きは、11月23日に東京（東京海洋大学）で開催予定の「第6回 協働実践研究会 日本語教育における協働学習実践研究シンポジウム」において行う予定です。中国からはもちろん、他のアジアの国々から日本語教育実践研究者をお呼びし、各地域でのピア・ラーニングや協働の取り組みについて情報交換し、今後の日本語教育の協働をどう進めていくのかについて議論する予定です。

この講座の講演を私たちに声をかけてくださった北京国際交流基金日本文化センターの松浦とも子さんには準備段階からずっとお世話になりました。たいへん感謝しております。また、講演の準備等、当日にも細かいサポートをくださった北京国際交流基金日本文化センターの守屋さんをはじめセンターのスタッフの方々に心よりお礼申し上げます。



【お知らせ】

北京日本文化センターでは、ただ今『日本語教育研究概論叢書』（全8巻）出版の準備を進めています。この中の1冊、「協働学習と日本語教育」の監修を池田と館岡が担当します。「協働学習と日本教育」は、高等教育出版社から2014年3月出版予定です。（北京のHPにも出ています http://blog.sina.com.cn/s/blog_8e214bab0101d5a5.html）。